

こんな先生
いるよ!

やぎさわ まさき
八木澤 優記 先生

経営学部 国際デザイン経営学科
准教授



「自分の中にある
小さな気づきを可視化して
社会とどうつなげるか」

デザインとは何かを学生に問う

どのような研究をされていますか。

デザインというマインド、デザインとは何かを研究しています。ゼミでは、個人的に引っかかっていることから新しい問いを広げ、それが社会とどうつながっているかを問うような演習を行っています。個人に端を発する小さな違和感も大きな社会問題に直結する可能性があるので、自分の違和感を可視化することは、どんな職業においても必要だと考えています。

頭で考えるだけでなく、手を動かす

研究室では美大のように手を動かして制作しているそうですね。

実際に物を作ったり、絵を描いたりすることをとても重視しています。なぜかというと、プランだけだったら良いことはたくさん考えつくんですよ。でも、実際に物を作ろうとすると、思い通りにいくことはほぼありません。そのことを経験してもらったために、物や絵で表現してもらっています。ただ、その出来栄を評価することが目的ではないので、制作によって気づきを得てもらうことを大切にしています。

2年生後期では、お笑い、作曲、演劇、身体表現、写真、短歌などの専門家に来てもらい、実際に自分も実行するという講義をしています。例えば、身体表現だったら議論の中からダンスをクリエーションするというお題が与えられて皆の前でそれを表現したり、お笑いなら実際に大喜利やコン

トをやったりします。すべてに共通しているのは、説明ではなく伝えるということ。身をもって実行するという点です。自分が感じたこと、考えたこと、一瞬頭によぎったことなどをどうやって表現するか。この授業は学生からも好評です。

デザインをツールとしてどう使うか

先生はデザイン科の出身で、どのようにデザインと経営が結びついたのですか。

小さい頃から絵を描くことが得意で、浪人期間を経て、東京芸術大学のデザイン科に入学しました。大学院修了後も大学に残ってアトリエを持ち続け、教員の仕事をしているうちに、企業との産学連携に関わるようになりました。

芸術系の学生には「好きな人」と「得意な人」の2パターンがあって、好きな人はその世界を深めればいいし、得意な人は外に出て広げていく役割を担った方がいいと考えています。私は後者で、自分にとってデザインはツールで、それを社会にどう使うかを考えていました。企業との連携が増えていく中で、デザインというものがとても誤解されていると感じていたときに、当学科の飯島淳一先生に、理系の学生にデザインを教えないかと誘われ、面白いと思い、着任することになりました。

デザインとは、結局のところ人生そのものなんですね。あなたがあなたとして生きていくなら、自分の中にあるどんな小さなことでも武器にしていってほしい。そういうマインドを学生に育んでほしいです。

城市奈那 (ジェイクリエイト)

【写真左】三越のウィンドウディスプレイのデザイン

【写真中】企業と共同開発した紙でできた鉄道模型「かみてつ™」

【写真右】学生が授業で制作したソファ

